芳ヶ平周辺におけるニホンジカ利用状況把握

予算区分：県　単	研究期間：平成 30～令和４年度	担　当：企画・自然環境係　山田 勝也

大平湿原における食害

Ⅰ　はじめに

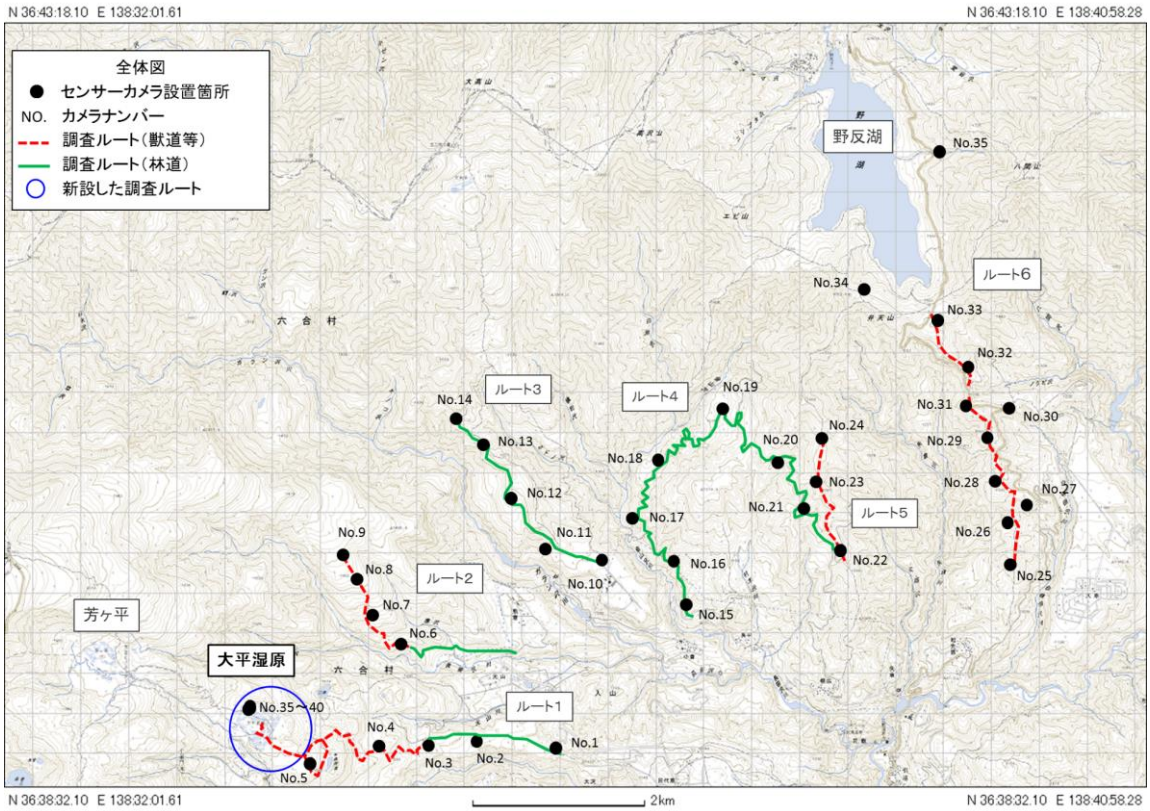
ニホンジカ（以下、シカ）生息地域は全国的に拡大傾向にあり、樹木や下層植生の衰退、人工林被害が増加している。県内では、平成 27 年に芳ヶ平湿地群（以下、芳ヶ平）がラムサール条約に登録され、群馬県の重要な自然資源となっているが、今後シカの生息域拡大により、芳ヶ平周辺もシカによる植物資源の劣化が懸念される。

芳ヶ平周辺地域におけるシカの生息状況を把握し、早期の被害対策の足がかりとすることを目的に、平成 30 年度から自動撮影カメラによる本区域内の生息密度推定を実施しているが、今回新たな地点において、獣類による顕著な植生被害が確認されたため、その状況を報告する。

Ⅱ　方　　法

これまで、芳ヶ平湿原から野反湖周辺を調査区域とし、区域内の林道や獣道等を調査ルートとして６つ設定し、自動撮影カメラによる調査を実施してきた。今回、調査区域内の大平湿原において、植生被害が確認されたことから、ルート１を延長し、新たに自動撮影カメラを設置した（図－１）。

今回は、大平湿原内の現地踏査により植生の食害を目視調査するとともに、調査中に確認した糞を採取し、DNA 分析により獣種を識別した。DNA 分析には、シカ・カモシカ識別キット（(株)ニッポン・ジーン）を使用した。



Ⅲ　結果及び考察

１　調査結果

令和３年６月及び７月に調査した結果、ミズバショウ（図－２）やヤマドリゼンマイ（図－３）等に食害が確認された。特にミズバショウについては調査時に確認したすべての個体（n＞25）が根際付近まで採食されており、健全な個体は確認されなかった。また、６月の調査時点でミズバショウの肉穂花序は１つ確認されたのみであった。

ミズバショウは、芳ヶ平を含む上信越国立公園の指定植物「景観構成に主要な種」に指定されており、大平湿原は芳ヶ平における僅少な分布地点となっている。既に景観に影響する高い採食圧が生じているため、継続調査を進めるとともに、対策を検討する必要があると判断された。

図－２　食害されたミズバショウ
（白枠内矢印は肉穂花序）

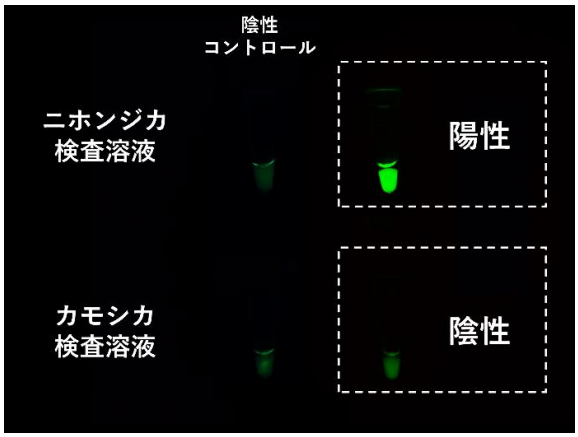
図－３　食害されたヤマドリゼンマイ

２　DNA 分析結果

大平湿原内では広範囲にわたりの獣類の糞（図－４）が確認され、形状からシカまたはカモシカであると判断した。シカ・カモシカ識別キットによる DNA 分析の結果、採取した糞はシカのものであることが確認された（図－５）。

このことから、シカが大平湿原を利用し食害が発生している可能性が高いと考えられるため、新設したカメラを含む調査ルートの定点観測を継続し、利用状況を詳細に調査していく。

図－４　大平湿原内で確認された糞



図－５　DNA 分析結果